

病害虫発生予察情報予報第 2 号（6 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。

農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

1. 農薬の使用前には、ラベルの内容を確認しましょう。
2. 農薬は、ほ場面積等に応じた必要量を調整し、残りが出ないようにしてください。万一、残った場合でも、水系に廃棄してはいけません。
3. 農薬の散布においては、周囲への飛散を避けるため、風向きに注意して下さい。また、強風時の散布は控えましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	6 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
水稻 (早期)	葉いもち	やや少	並	126～135 137～142	
	イネミズゾウムシ	やや多	並	170-171	
水稻 (早植え)	葉いもち	並	並	126～135 137～142	
	イネミズゾウムシ	やや多	やや多	170-171	
水稻 (普通期)	葉いもち	並	並	126～135 137～142	いもち病
	スクミリンゴガイ	多	多	162～168	
	<ol style="list-style-type: none"> 1. トビイロウンカ 薬剤の効果を確保するため、育苗箱処理剤は、基準量をむらなく処理する。 2. もみ枯細菌病・白葉枯病 もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や白葉枯病の常発圃場では、これらに登録のある育苗箱施用を必ず処理する。 3. スクミリンゴガイ 暖冬で経過したことから、越冬生貝率が高い。このため、今年の発生は多いと予想されるので、浅水管理や薬剤防除等の対策を徹底する。 				
水稻全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	やや少	並	158～159	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	やや多	やや多	208~209	 ハダニ類
	うどんこ病	少	少	198~200	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	並	202~207	
	アブラムシ類	やや多	やや多	213~214	
<p>1. ハダニ類 本圃での発生を抑えるため、育苗期の防除を徹底する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達が少ないとされる気門封鎖系薬剤も活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いので、5~7日間隔で計2回を1セットとして散布する。</p> <p>2. 炭疽病、疫病、萎黄病 前作では炭疽病により本圃で大きな被害を受けた圃場がみられた。今作での発生を抑えるため、親株床から定期的な薬剤防除を徹底する。また、これらの伝染拡大を防ぐため、雨よけや水滴の小さい灌水装置を利用した灌水を行う。さらに、発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。</p>					
アスパラガス	茎枯病	並	並	313~314	 ネギアザミウマ
	褐斑病	並	並	314~315	
	斑点病	やや少	並	314	
	アザミウマ類	多	やや多	317~318	
	ハダニ類	やや多	やや多	318~319	
<p>1. アザミウマ類 現時点において、発生が平年より多く、また、今後も多発生が予想される。虫見板（約20×30cm）への払い落とし（擬葉部を2~3回叩く）で、成虫が1ヶ所当たり3頭以上認められる場合は薬剤防除を行う。</p> <p>2. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天日には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも3週間間隔を目安とし、発生前から薬剤防除を実施する（前年多発生圃場及び既発生圃場、降雨日が続く場合は間隔を短縮）。特に、茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。</p>					
施設果菜類	<p>1. アザミウマ類、コナジラミ類 施設内に残ったアザミウマ類やコナジラミ類の野外への拡散を防ぐため、栽培終了時に施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行い、これらの害虫を死滅させる。</p>				
果樹全般	果樹カメムシ類	並	少	240~243	
	<p>1. 果樹カメムシ類 一部では果樹園内への飛来が確認されている。発生状況は地域や園により異なるため、園内外を確認し、発生が確認されたら早急に防除を行う。</p>				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
カンキツ	そうか病	並	並	209~211	 チャノキイロアザミウマ
	かいよう病	並	並	213~215	
	黒点病	並	並	211~213	
	灰色かび病	少	少	215~216	
	ミカンハダニ	多	多	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	多	多	229~233	
1. 傷果、落果防止対策 本年は樹や園によって着果量に差がある。病虫害による減収を防ぐため、傷果・落果の原因となる各種病虫害の防除を徹底する。特にチャノキイロアザミウマについては今後も多発生が予想されるため、発生状況に注意するとともに6月上旬までの防除を徹底する。					
2. ミカンハダニ 現時点で発生が多く、今後も多発生が予想される。殺ダニ剤に対する感受性の低下を防ぐため、6月まではマシン油乳剤での対応を基本とするが、着果が少ない樹や樹勢が低下している樹ではマシン油乳剤の使用を控え、殺ダニ剤散布での対応とする。					
ナシ	黒星病	やや少	並	279~282	 ナシ黒星病
	ナシヒメシクイ	やや多	やや多	293~295	
1. 黒星病 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬頃は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。					
2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
ブドウ	黒とう病	やや多	やや多	327~329	 ブドウ黒とう病
	べと病	やや少	少	330~332	
	褐斑病	並	並	332~333	
	チャノキイロアザミウマ	多	多	339~340	
1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。					
2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。					
キウイフルーツ	1. かいよう病 6月まではすべての園において、銅水和剤を主体とした定期的な薬剤防除を実施する。特に幼木は成木に比べ発病しやすく影響が大きいため、薬剤防除を徹底する。				
					 葉の斑点症状

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	並	413~414	 チャノコカクモンハマキ
	クワシロカイガラムシ	多	多	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや少	419~420	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	やや多	418~419	
	チャノコカクモンハマキ	多	多	417~418	
	チャノホソガ	やや多	やや多	416	
	炭疽病	やや少	並	408~409	
<p>1. クワシロカイガラムシ、チャノコカクモンハマキ 今後、多発生が予想される。園内の発生状況の把握に努め、発生を認めた場合は農薬の使用基準に注意して防除を行う。</p> <p>2. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）が、羽化期～成虫発生初期にあたり防除適期であるため、発生圃場では薬剤防除を実施する。</p>					

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（令和元年 5 月 24 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	30 (23.3°C)	50	高い
降水量	40	40 (339 mm)	20	やや少

Ⅲ. 6月の予報

水稻（早期、上場地域）

定期調査：12 圃場
調査日：5月17日

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 補植用苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので活着後に速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

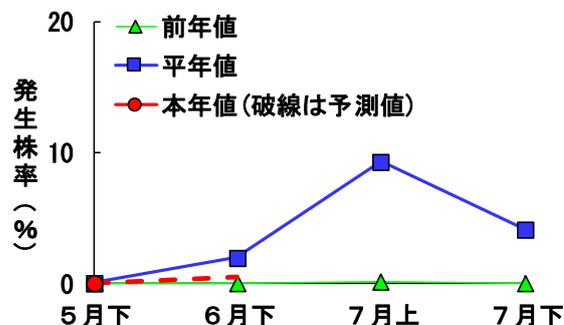


図1 早期水稻での葉いもちの発生推移

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

食害株率：31.7%（平年31.6%、前年45.0%） 平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。



定期調査圃場の様子

水稻（山間早植え）

定期調査：12 圃場
調査日：5月21日

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

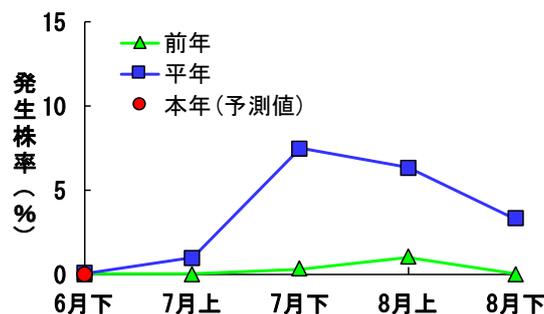


図1 早植え水稻での葉いもちの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

食害株率 0.7%（平年1.6%、前年1.3%） 平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

水稻（普通期）

1. 葉いもち

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成30年の普通期水稻（10月上旬）における穂いもちの発生株率は、12.9%（平年16.4%）であり、平年並であった。〈±〉

(2) 6月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 補植苗や畦畔に放置された残り苗は、葉いもちの伝染源になるので速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

①平成31年（2019年）4月に調査した、県内3地点の用排水路における平均越冬生貝率は76.2%であり、平年（41.0%）より高かった。〈+〉

②平成30年（2018年）12月～平成31年（2019年）2月の平均気温は 8.3℃であり、平年（6.7℃:10年平均）より高かったことから、水田内での越冬生貝率は平年より高いと推定される。（図1. 過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。）〈+〉

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 用排水路・クレークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。
- (2) その他については、特記事項を参照する。

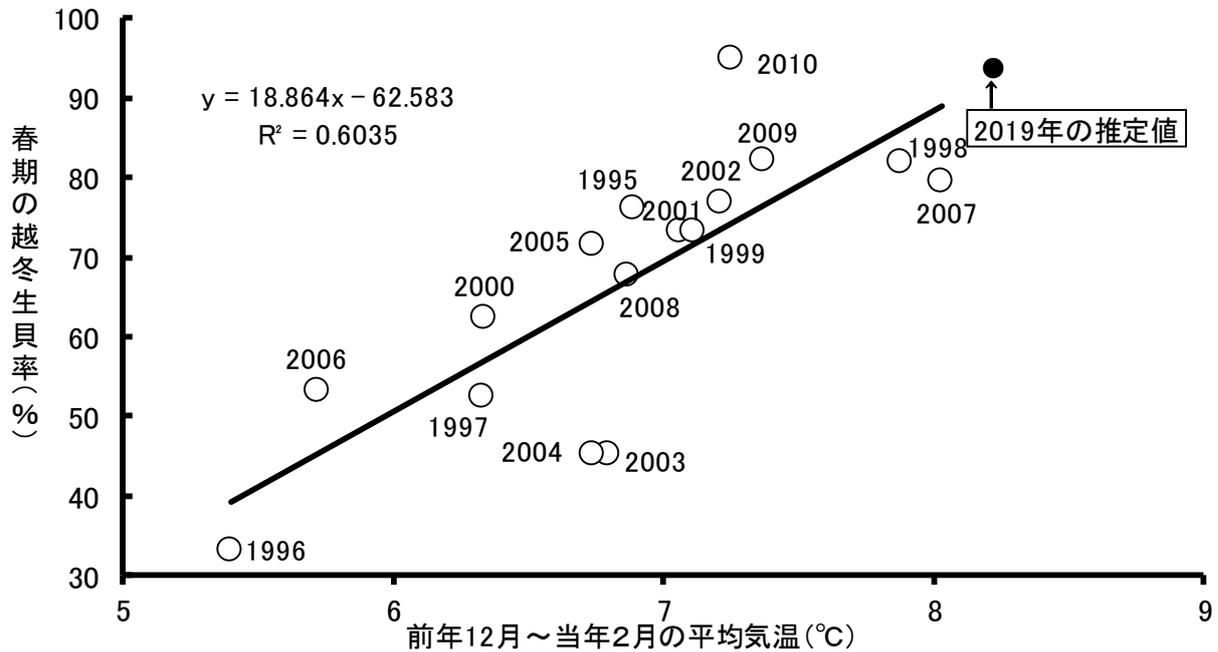


図1 冬期(12～2月)の佐賀市の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率(4月)との関係

○: 1995～2010年の実測値(佐賀市の気温と、佐賀市内の同一水田における越冬生貝率。水田の越冬調査は、2010年で終了)

●: 2018年12月～2019年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した2019年春季の越冬生貝率。

水稻(全般)

1. 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(早期水稻)

発生株率 0% (平年0%、前年0%) 平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

② 小麦における20回すくい取り(第1表参照)

ヒメトビウンカ第1世代幼虫数50.2頭(平年20.6頭、前年14.0頭)

平年比: 多(+) 前年比: 多(+)

(2) 近年の動向

① 小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況(第2表参照)

保毒虫率は、近年、やや低く推移している。 <一～±>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカを対象とした薬剤防除を行う。

第1表 小麦圃場におけるヒメトビウンカの発生
(令和元年5月16～21日)

調査地点	20回すくいとり虫数(2圃場平均) 頭
佐賀市1	25.0
佐賀市2	27.5
鳥栖市	3.5
神埼市	129.0
小城市1	47.0
小城市2	12.5
多久市	105.0
武雄市	134.5
鹿島市	9.5
吉野ヶ里町	52.0
白石町	6.5
平均	50.2

第2表 近年のヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

	平成20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年
保毒虫率 (県平均)	% 0.9	% 1.6	% 1.3	% 4.2	% 0.9	% 1.0	% 0.0	% 0.3	% 0.0	% 1.1	% 0.3

注) 5月中～下旬にヒメトビウンカを小麦圃場から採集して検定を実施(令和元年の検定は、今後実施予定)。

イチゴ(育苗圃)

(定期調査10圃場)
調査日: 5月16～21日



定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率: 3.6% (平年2.2%、前年2.4%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

(2) 6月の気象予報

気温が平年より高く、降水量がやや少なく多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場によりハダニ類の薬剤感受性が異なるため、

防除効果を確認し、薬剤を選定する。

(2) その他については、特記事項を参照。

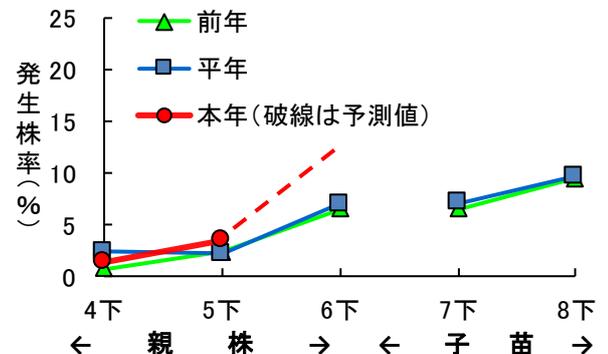


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量: 平年より少ない (前年より少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率: 0% (平年17.0%、前年22.8%)

平年比: 少(-) 前年比: 少(-)

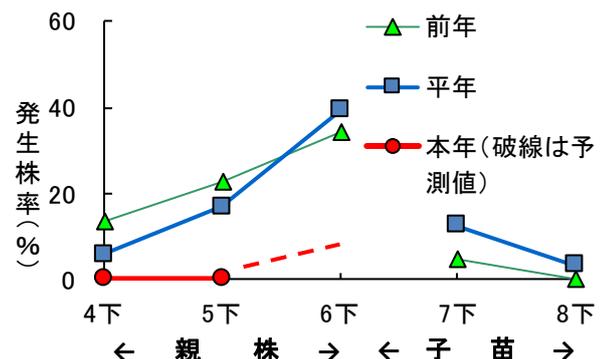


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

(2) 6月の気象予報

気温が平年より高く、降水量がやや少なく、少発生の条件〈ー〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件〈一〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 梅雨期は、病原菌の飛散・感染に好適な時期であるため、防除を徹底する。

(2) その他については、特記事項を参照する。

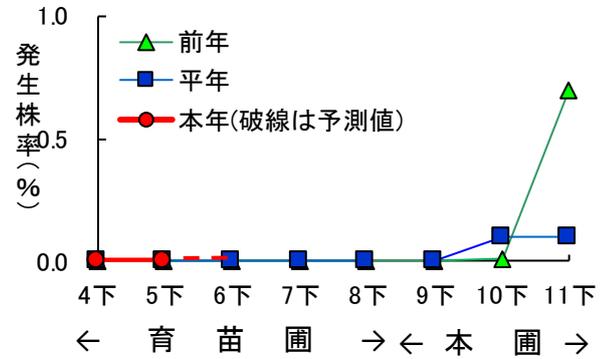


図1 イチゴ立枯症の発生推移

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：16.4%（平年10.0%、前年10.4%）

平年比：やや多〈±〜+〉 前年比：やや多〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

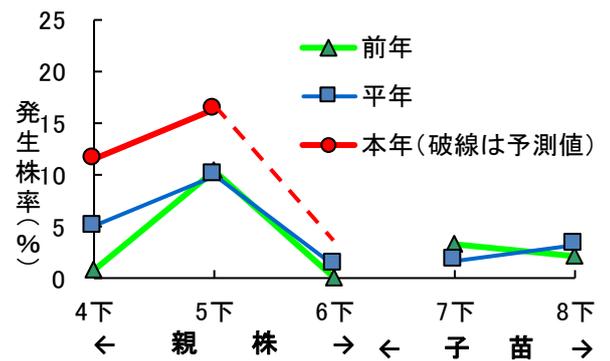


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

定期調査：8圃場

調査日：5月16～21日



定期調査圃場の様子

1. 茎枯病

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：0.1%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：やや多〈±〜+〉

(2) 6月の気象予報

降水量が平年並よりやや少なく、やや少発生の条件〈一〜±〉

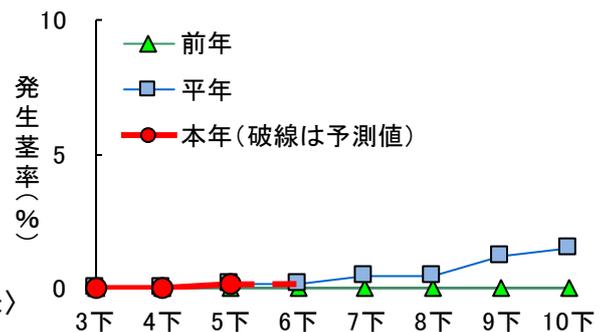


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-〜±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

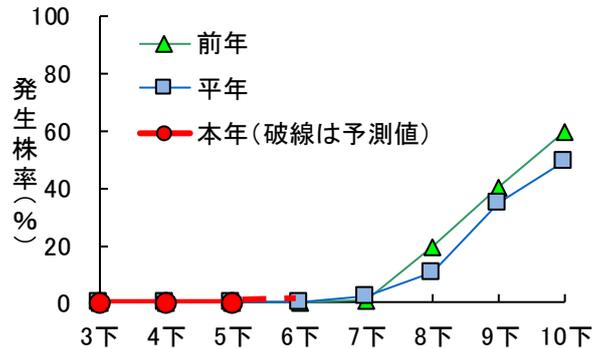


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生率：0%（平年0.7%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量が平年よりやや少なく、やや少発生の条件（-〜±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

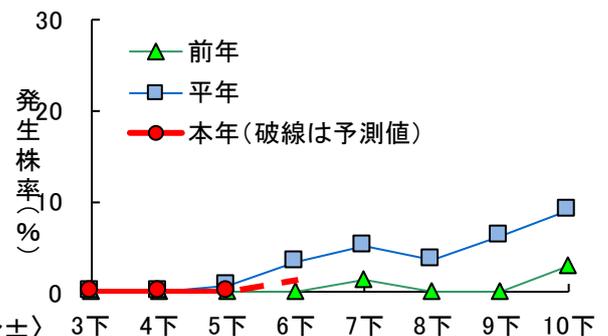


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生率：51.3%（平年25.3%、前年41.3%）

平年比：多（+） 前年比：やや多（±〜+）

(2) 6月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

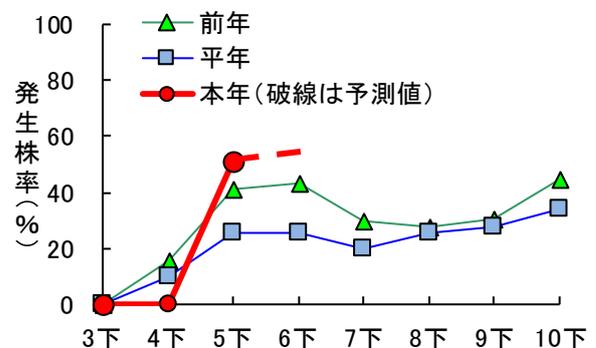


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

5. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

気温が平年より高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発生すると防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。

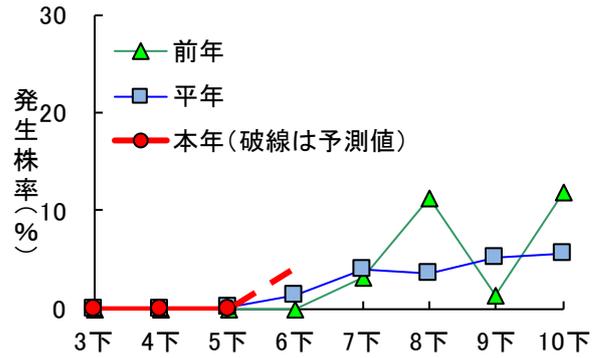


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

果樹全般

1. カメムシ類

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容（4月～8月上旬）

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（詳細は、平成31年3月13日付け病害虫対策資料第15号参照）

① 越冬地点率：54.5%（平年39.1%、前年68.2%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや少（-～±）

② 平均越冬虫数：0.24頭/m²（平年0.27頭/m²、前年0.67頭/m²）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 発生の現況

① 予察灯（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

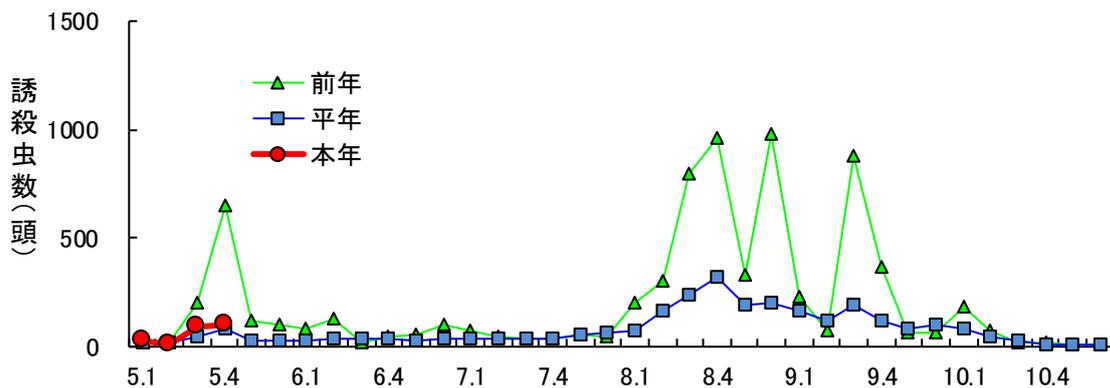


図1 予察灯（佐賀市、小城市、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：並〈±〉 前年比：少〈-〉

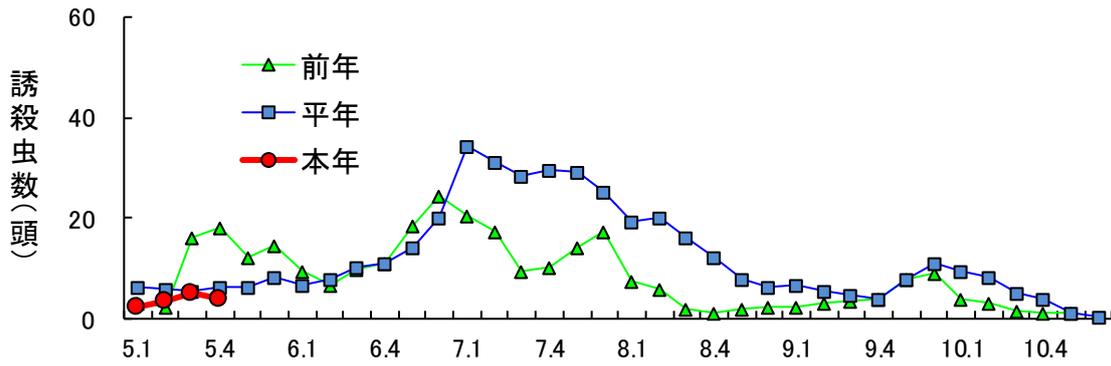


図2 フェロモントラップ (小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

カンキツ

定期調査：7 圃場
調査日：5 月 21～22 日



定期調査圃場の様子

1. そうか病

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0%、前年 0%)

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 6 月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件〈-〜±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。ただし、1 回目の散布から 200 mm 以上の降雨があれば薬害を生じにくいいため、近接散布が可能である。

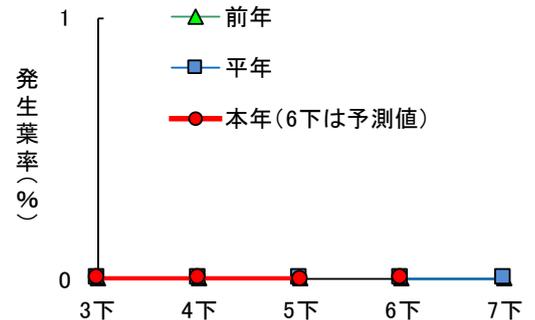


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0% (平年 0.2%、前年 0%)

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 6 月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件〈-〜±〉

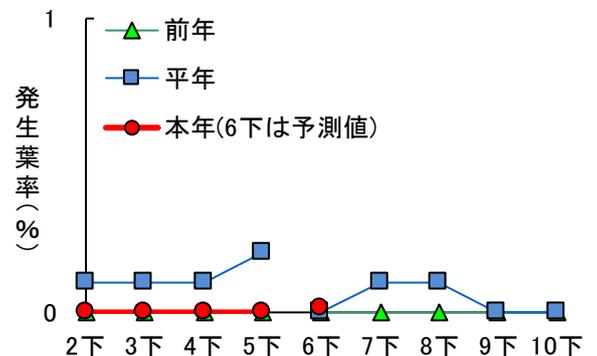


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5 月下旬までは旧葉を調査

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 前年の発生状況（図 1）
平年並の発生量で推移したため、圃場内の菌密度は平年並と考えられる〈±〉
- (2) 6 月の気象予報
降水量がやや少なく、やや少発生の条件〈一～±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。
- (2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、累積降雨量が 200～250mm（マシン油乳剤加用の場合は 300～400mm）に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (3) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

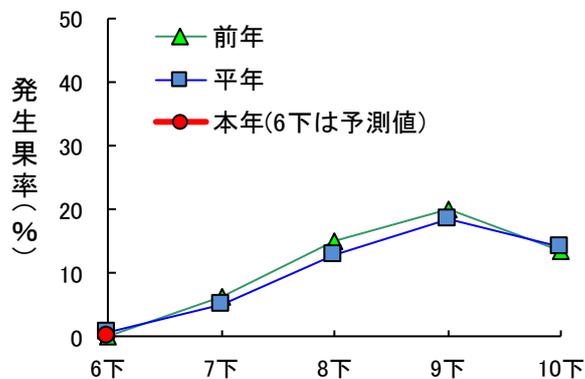


図1 カンキツ黒点病の発生推移

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況
① 定期調査（図 1 参照）
発生葉率：13.7%（平年 4.4%、前年 1.4%）
平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉
- (2) 6 月の気象予報
気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率 30%未滿または 1 葉当たりの雌成虫数が 0.5～1 頭）に防除を行う。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年 1 回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照とする。

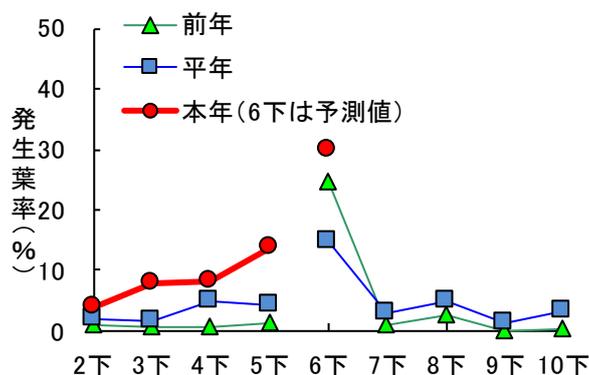


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況
① 黄色粘着トラップ（図 1 参照）
平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

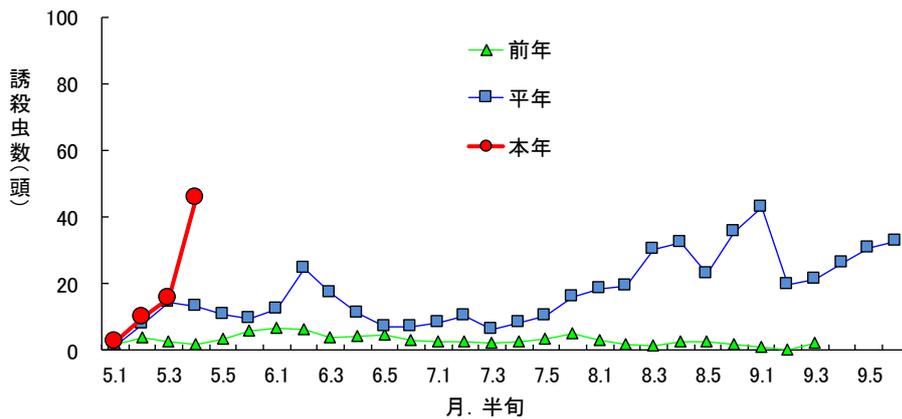


図1 黄色粘着トラップによるチャノキロアザミウマの誘殺数の推移 (果樹試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、第2世代成虫の発生ピークは6月上旬頃にみられている。被害を防止するため、6月上旬までに薬剤防除を実施する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等は本虫の発生源となるため、防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

ナシ

定期調査 (6 圃場)
調査日: 5月20日

1. 黒星病

[【 概要に戻る 】](#)



定期調査圃場の様子

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1、2 参照)

発生葉率: 0.2% (平年1.0%、前年1.0%)
 平年比: やや少 〈一~±〉 前年比: やや少 〈一~±〉
 発生果率: 0% (平年1.3%、前年0%)
 平年比: やや少 〈一~±〉 前年比: 並 〈±〉

(2) 6月の気象予報

気温が高く、降水量がやや少なく、少発生の条件〈-〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

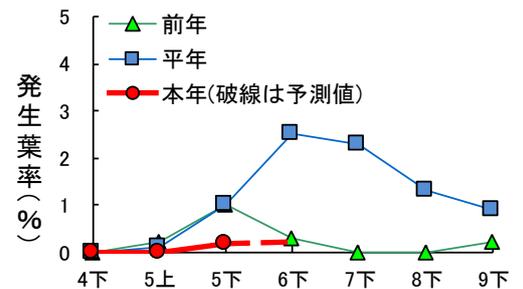


図1 ナシ黒星病(葉)の発生推移

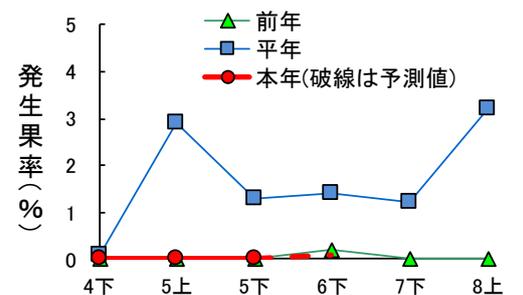


図2 ナシ黒星病(果実)の発生推移

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① ナシ園等に設置したフェロモントラップ（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

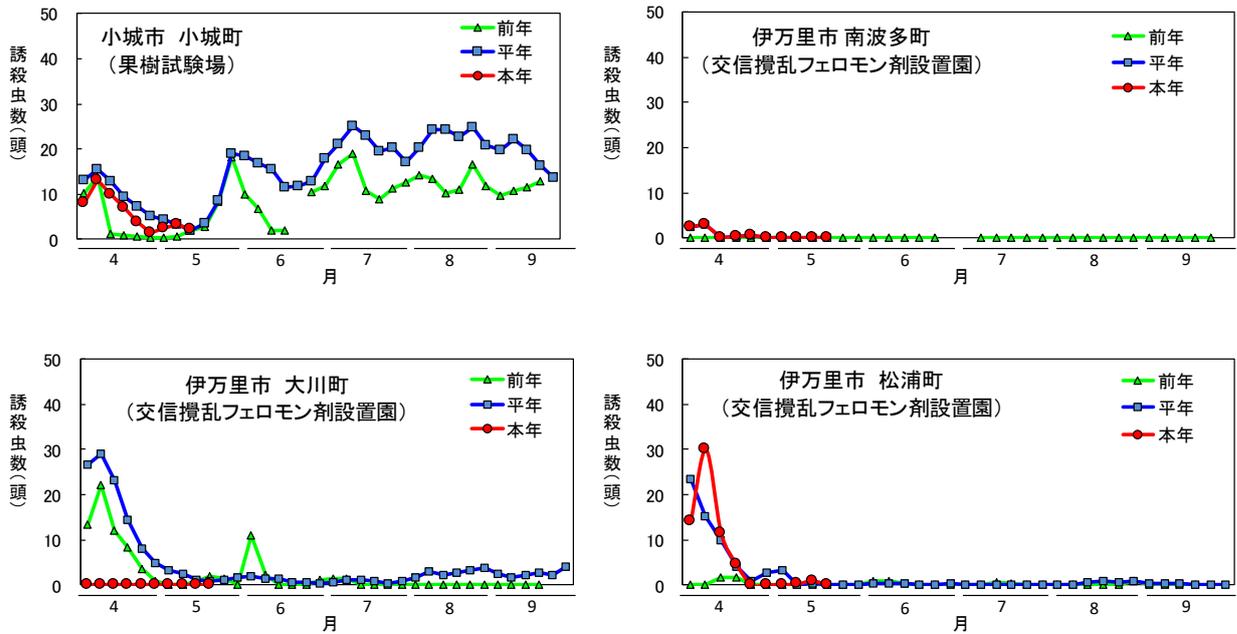


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

② サクラに設置したフェロモントラップ（表1参照）

サクラに設置しているフェロモントラップ（伊万里市3ヶ所）での、4月第1半旬から5月第4半旬までの誘殺数は前年よりやや多い（±～+）。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数（頭）
（西松浦農業改良普及センター調査）※4月～5月4半旬の合計値

地点名	H28年	H29年	H30年	R1年
伊万里市 南波多町	18	30	38	76
伊万里市 大川町	31	32	10	22
伊万里市 新天町	32	14	78	54
計	81	76	126	152

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 交信攪乱フェロモン剤の設置を予定している園では、6月上旬までに設置する。

ブドウ

定期調査（6圃場）
調査日：5月20～22日



定期調査圃場の様子

1. 黒とう病

[【 概要に戻る 】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0.8%（平年0.1%、前年0.2%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝葉の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

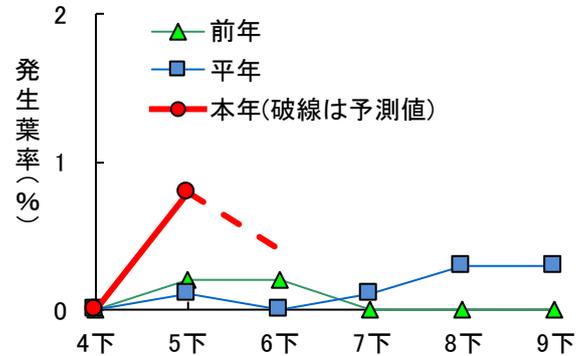


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.1%、前年0.3%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 6月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) ブドウベと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

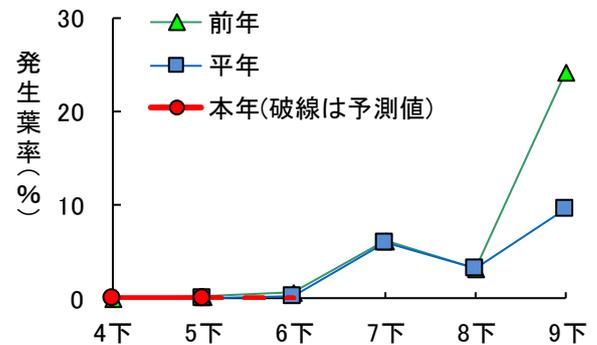


図1 ブドウベと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 6月の気象予報

気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。
- (2) 袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。

茶

定期調査：7圃場
調査日：5月21～22日



1. クワシロカイガラムシ

【概要に戻る】

定期調査圃場の様子

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査
発生株率（雄繭）：26.4%（平年15.5%、前年3.6%）
平年比：やや多（±～+） 前年比：多（+）
 - ② 6月の気象予報
気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件（+）
 - (2) 6月の気象予報
気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 薬剤による防除は成虫に対して効果がほとんどないため、幼虫ふ化期をねらって防除を行う。
 - (2) 散布量を多くし、枝全体がぬれるようムラなく薬液をかける。

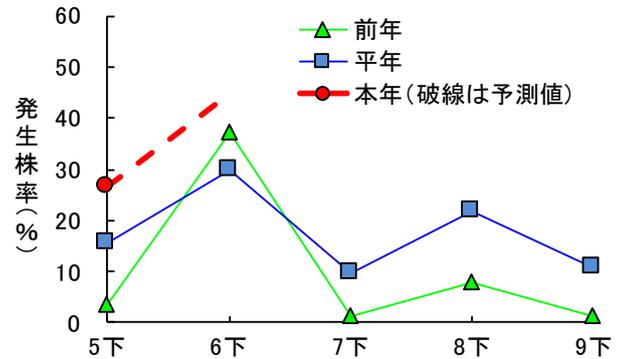


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

2. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
20回たたきおとし虫数：10.9頭（平年8.9頭、前年19.9頭）
平年比：並（±） 前年比：少（-）
 - ② 吸引粘着トラップ（図2参照）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

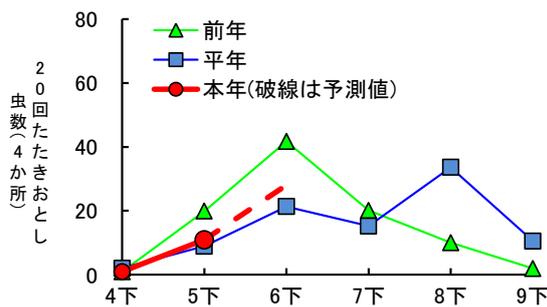


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

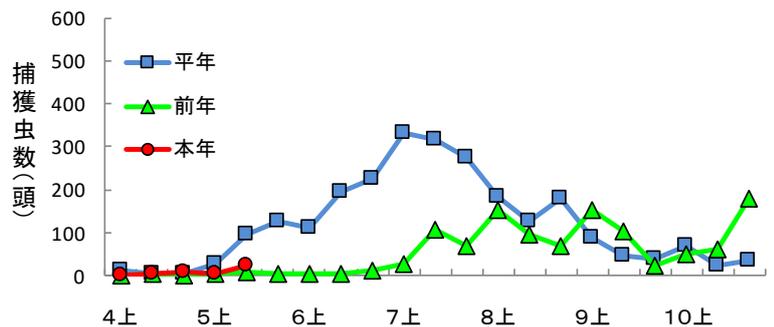


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

- (2) 6月の気象予報
気温が高く、降水量がやや少なく、多発生の条件（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 二番茶萌芽～二番茶の開葉初期に防除を実施する。
 - (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：1.1頭

（平年3.0頭、前年0.4頭）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶萌芽～二番茶の開葉初期に防除を実施する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

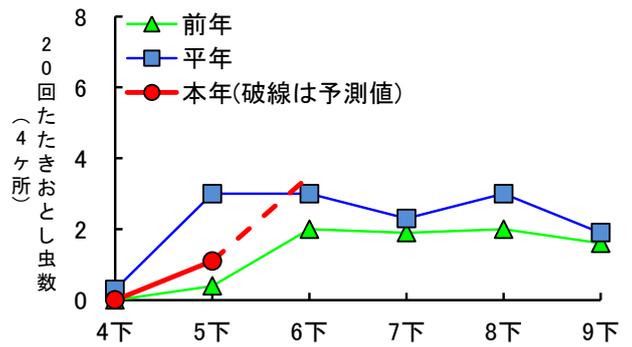


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

被害葉数：0.6枚/m²（平年0.0枚、前年0枚）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

② フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや多（±〜+） 前年比：やや多（±〜+）

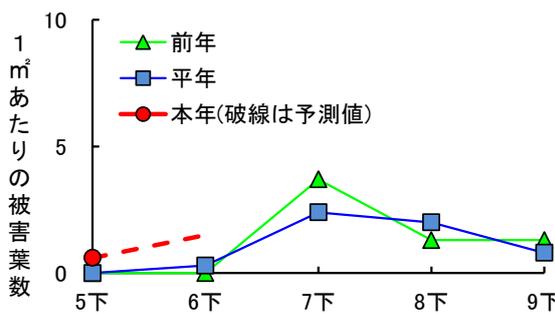


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の発生推移

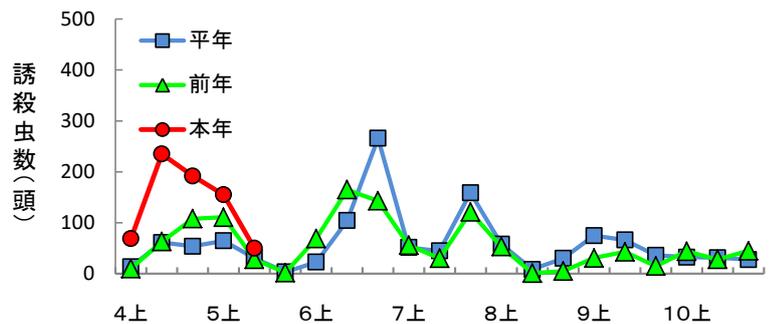


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移（嬉野市嬉野町、茶業試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。ただし、二番茶摘採園では、摘採前日数に注意し、新葉展開期に防除を実施する。

5. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数 : 0 枚/m² (平年 1.1 枚、前年 0 枚)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比 : 並 (±) 前年比 : 並 (±)

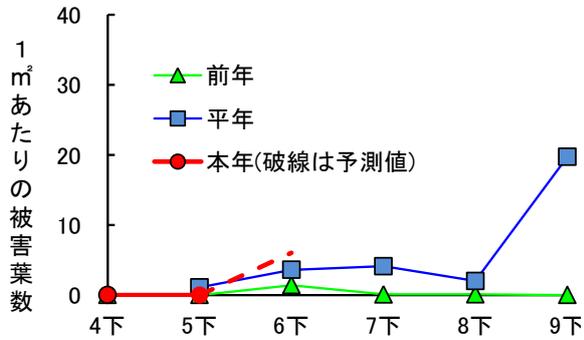


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

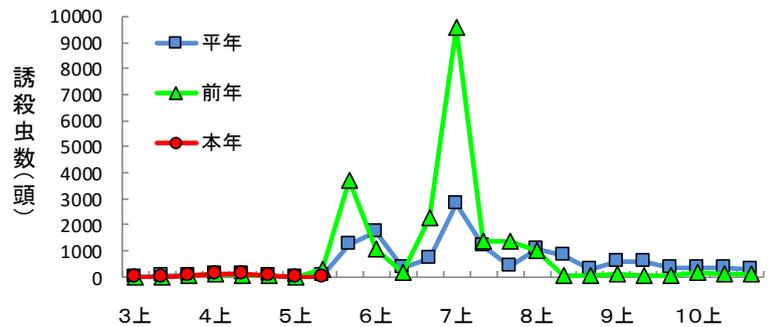


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 6月の気象予報

気温が高く、多発生条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発蛾最盛期から1週間後頃が適期となるのでこの時期に確実に防除を実施する。ただし、二番茶摘採園では、摘採前日数に注意し、新葉展開期に防除を実施する。

連絡先 : 佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougijutsu@pref.saga.lg.jp